

ひがしなかた
東中田A古窯

所在地 豊橋市東細谷町
(北緯34度41分33秒 東経137度28分52秒)
調査理由 一般国道23号豊橋東バイパス
調査期間 平成19年6月～9月
調査面積 1,591㎡
担当者 酒井俊彦・岡久雅浩・早野浩二



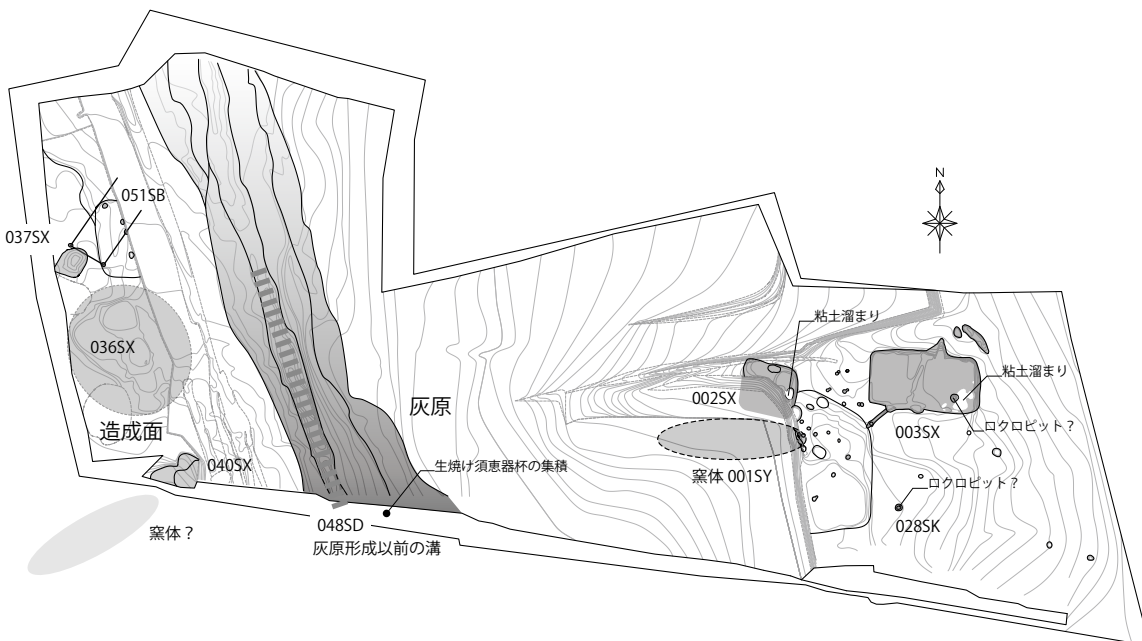
調査地点 (1/2.5万「二川東」)

調査の経過 東中田A古窯は、飛鳥・奈良時代の須恵器を焼成した須恵器窯である。本古窯の発掘調査は、一般国道23号豊橋東バイパス建設にかかる事前調査で、国土交通省中部地方整備局名四国道事務所より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成19年6月～9月、調査面積は1,591㎡である。

立地と環境 東中田A古窯は、梅田川上流域左岸の高位段丘面、天伯原台地が小河川によって開析された小支谷内の最深部に立地する。窯跡付近の標高は60m前後である。付近の小支谷には、中田古窯群、深田古窯群、境川古窯群、東籠田古窯などの須恵器窯が多く分布し、湖西窯跡群(一里山窯跡群)の一角を形成している。

調査の概要 発掘調査の結果、小支谷内の斜面において窯体1基(001SY)、小支谷の緩傾斜面、造成面において作業施設等の窯業生産関連遺構(002SX、003SX、036SX等)、谷底に形成された灰原、灰原下位の溝(048SD等)を確認した。

窯 体 調査区東部、小支谷内の西向き斜面において窯体001SYを検出した。001SYは窯体の大部分が農地の造成によって失われ、煙道付近がわずかに残存するのみであった。小動物の巣穴による攪乱も著しく、構造等を明確に示すことは難しいが、1回以上の補修があること、煙道の方向が窯体の主軸と大きく異なることを確認した。なお、001SYにおいて遺物は出土しなかった。



主要遺構配置図 (1/500)

**窯業生産
関連遺構** 窯業生産関連遺構として、調査区東部の西向き斜面、001SY付近の緩傾斜面において、作業施設と考えられる竪穴状の遺構002SX・003SX、ロクロピットの可能性がある土坑028SK、調査区西部の東向き斜面に造成された平坦面において、不整形の落ち込み036SX・037SX、掘立柱建物051SB等を確認した。

001SY北西に位置する002SXは、一辺約4.0m、深さ約0.4mで、北辺には須恵器甕の破片を芯材に用いた竈が構築されていた。また、西辺付近の床面上に粘土溜まり、粘土溜まりの上面に生焼け須恵器の集積を確認した。001SY北東に位置する003SXは、長軸約7.5m、短軸約4.0m、深さ約0.6mで、北辺中央付近には竈を構築する。竈は煙道部分までが良好に残存していた。床面には、中央付近に短軸方向に対してやや斜行する間仕切り溝が配されるが、支柱穴は確認されなかった。南西隅には、ロクロピットと思われる径約0.5m、深さ約0.4mの断面形が有段状となる土坑P1が配置され、P1周囲には粘土溜まりも検出された。001SY南東に位置し、ロクロピットの可能性がある028SKは、下部構造の一部と考えられる粘土塊が残存していた。

036SXは、径約8.0m、深さ0.6mの不整形の落ち込みで、東向き斜面の窯体に付属すると考えられる。埋土中には、窯壁、炭化材、生焼け須恵器、粘土塊が多く含まれることから、製品の選別に関係する遺構とも推測される。037SXは、径2.0m、深さ約0.3mの土坑状の落ち込みで、黒色土が充填されていた。036SX・037SX 付近で検出した051SBは、桁行1間以上、梁間1間の掘立柱建物である。なお、現状において、東向き斜面に窯体は確認されないが、調査区南西付近において、焚口の付近に相当するとも思われる灰と炭化物の広がり(040SX)を確認した。

灰原 小支谷内の谷底に形成された灰原は、東向き斜面に構築された窯体の操業に伴うと考えられる。灰層は、南北方向の谷底に沿って、約5～8mの幅で堆積し、調査区南端付近が最も厚い。厚さは最大約0.7mで、最下層にはほとんど灰のみによって形成された灰層も確認された。灰原中には生焼け須恵器杯の集積も検出された。一方、西向き斜面に構築された001SYの灰原は、農地の造成によって完全に失われていた。灰原下位の溝048SDは、灰原形成前に谷底に掘削された幅約1.0m、深さ約0.4mの溝で、操業に先行する段階の窯跡周辺の造成に関係する遺構と推測される。

出土遺物 本古窯の出土遺物は、窯業生産関連遺構と灰原付近から出土した陶器が大部分を占める。これらは湖西窯編年Ⅲ期第3小期を主体とし、7世紀末葉を前後する年代が与えられる。器種は杯、蓋が多く、その他、甕、高杯、鉢、臚、フラスコ形瓶、横瓶、平瓶、台付長頸壺、ミニチュア横瓶、ミニチュア台付長頸壺、陶錘、陶馬、円面硯等がある。なお、003SXからは鉄鏃、砥石等も出土した。

まとめ 本古窯の発掘調査においては、窯体の残存状況は良好ではなかったが、図らずも窯体とその周辺の作業施設、灰原等を調査することができた。それらの相互の関係が明らかになった点は、大いに特筆される。今後、各遺構についての検討を深めることによって、生産用地の土地開発、製品の製作から流通・廃棄までの過程、生産者の居住形態など、当地域の須恵器生産に関係する多くの知見を提供できるものと思われる。また、灰原等からは、同時期の器種の多くを網羅する資料が得られた。これらは、当地域における生産内容、ひいては、生産領域、生産地間の関係を知る良好な資料として評価される。

(早野浩二)



調査区全景



調査区西部(窯体001SY周辺)



調査区東部(谷底に形成された灰原)



窯体001SY完掘



窯体001SY断面



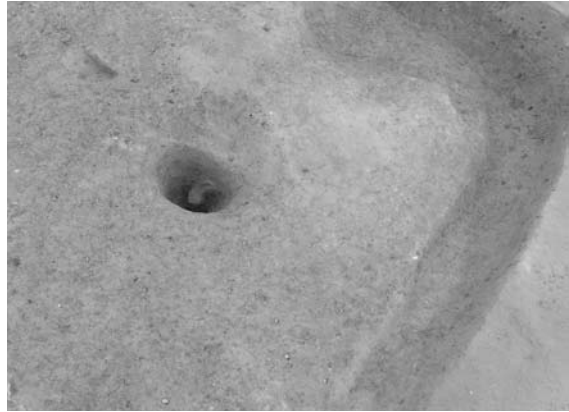
作業施設002SX遺物



作業施設002SX生焼け須恵器の集積と粘土溜まり



作業施設003SX全景



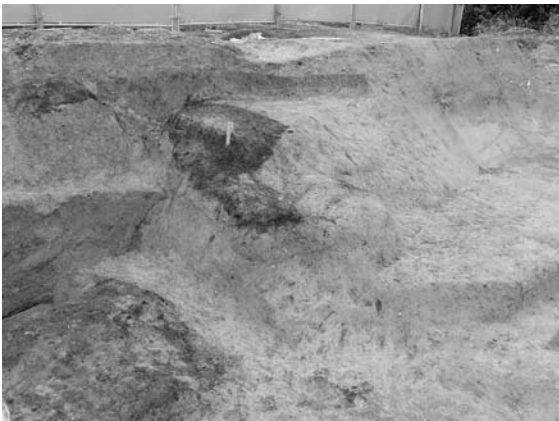
作業施設003SXロクロピットと粘土溜まり



ロクロピット? 028SK断面



落ち込み036SX遺物



焚口付近? 040SX



灰原下位の溝048SD全景